

卒業論文要旨

平塚市の工業の性格

井上 万喜子

都下における桑園集中地の一例

砂川町の桑園依存について

— その変遷と現状 —

伊 木 邦 子

戦後の養蚕業の復興が一時的で、数量においても目覚ましくない結果にとどまり、今後の見通しも暗い全国的な現状にあって、都下の農村では、この養蚕業の衰退に加えて、都心部及び近郊都市の膨張、住宅地の拡大が、農地の減少ばかりか、残る農村の経営内容の近郊農業化を促して、衰勢にある養蚕業の駆逐を一層早めて来た部分も少なくないと思われる。

桑園分布の最大に達した昭和の初期と現在の都下各市町村単位の桑園分布から、養蚕業自体の推移と、地域の変遷という外部的でかつ養蚕に無関係であり得ない現象とが、どの程度、各市町村の桑園分布に表われたかを、専ら統計によって知った上で、砂川町における養蚕自体の変遷と、地域の変貌の養蚕に与えた影響を調べたいと思つた。

砂川町を辿るのは、養蚕業の最盛期には、砂川より以上に養蚕に依存していた多数の町村で戦後の桑園回復が著しくないので、現在の砂川が、都下で最大の桑園面積を示し、桑園率、養蚕農家率もなく、養蚕依存の比較的大なる地域であるという数字上の特異性及び、行政単位としてほぼ同一の土地条件を有するという取扱い上の容易さばかりでなく、平地農村として立川、福生という小都市に接している上に、市場関係からみても決して都心部と無関係であり得ない位置にあること、などから戦後の農業地域の変貌の一例と

しても、なおこれだけの桑園を所有することは、特殊性があると考えたからである。

従って、内容は、堤庄の砂川の、都下各市町村の桑園分布にしめる位置をみた上で、桑園依存を中心として、まず砂川の農村の变化を知り、次に町全体の状況について、及びそれが農業、中でも桑園利用にどういふ影響を与えたかを、平面的な相違に表われる範囲でまとめた。

戦後の砂川の状況を概括すれば、町内には労働人口を吸収するべきものは新たに起こっていないが、町外に勤め先をもつ非農業人口の増加が顕著で、宅地も徐々に農地を蚕食して増加の傾向にあること、しかしこれまでのところは、戦後の一時的な減少を除けば、耕地、農家数とも停滞気味で、相対的な減少にとどまること、農業経営の変化といつても、尚、桑樹及び自給的色彩の強い作物が80%を占めていて、ソサイ作付が僅かに増加の傾向をみせている程度であること、そして耕地規模の大小による農業経営の部落差は、ソサイ作付及び桑園経営に表われているが、町全体の農家にとって最大の变化は、おそらく耕地の減少ではなく、立川の発展、基地の設置及び都心部や周辺地域の発展により農家の農外従業者が多くなったことであると思われる。

そして非農業戸数の増加という地域の一面的な変貌の、農家への影響が、町全体として見た時、尚少い原因の数々が、砂川の都下最大の桑園集中を可能ならしめているのである。つまり、一般に従来の養蚕業が土地の集約的利用を目的として、農村労働力の過剰を吸収して行われていたのに対して、現在の砂川の養蚕業は、勿論一部の小規模経営農家には尚その傾向がみられるが、畑作労働の限界以上の農地を、農地の体面を保つために桑園にしているものが少なくない。従って農閑期の労働、

それも主に老人や女、子供の家族労働で行われる程度の養蚕が多く、これの出来ない家では、桑園を所有しながら養蚕を行わなくなっている。このように桑園があるのに養蚕依存が小さいのは、養蚕収入の低さが根本的な原因ではあろうが、農家人口の他産業へのより有利な就取が可能な現在の砂川の位置条件及び自給程度の耕作に十分な耕地を所有する農家の多いことがこの桑園の粗放利用を可能ならしめていると思われる。また、養蚕収入に代るほどの商品作物がないことが、桑園を維持して低効率な労働を無視してもこの桑園で現金収入源たる養蚕を維持させているのであって、顔面は下つても、大規模な農地買収がなければ、急激に減少するとは考えられないのがこの桑園なのである。

以上